

# 「偽比丘」の見分け方

マレーシア仏教青年総会

翻訳：Paññādhika Sayalay



## 目次

---

序説 .....	3
偽比丘の見分け方及び護持指南 .....	4
マレーシアの仏教 .....	6
如何にして偽比丘を見分けるか .....	8
出家者の責務 .....	13
後記 .....	15
付録1 南伝出家者托鉢への布施・供養について .....	19
付録2 サンガ護持編 .....	23
南伝出家者護持指南 .....	31



## 序説

---

釈迦牟尼仏が 2500 年の前において、真理に覚悟（＝覚醒）した。その時、この偉大な真理を更に広く、更に長く伝わるようにとの願いから、サンガを成立させ、また広大な在家信徒を受け入れた。出家の僧侶たちの責務は、仏の制定した律儀により、和合して共に住し、徳業を修し、仏法の教義で以て、信徒を導く事である；在家居士は、僧侶たちを護持し、サンガが安住の場であるようにし、僧侶たちが、弘法と衆生の利益のために力を発揮できるように、サンガを支える事である。

仏陀入滅の後、仏法を維持・護持し、仏法を宣揚する責務は、サンガによって継承されてきた。故に「賛僧功德経」において、”僧（＝サンガ）は大地の如く、一切の善法功德を養える”といい、また”殊勝妙宝大徳僧（＝サンガ）、長養衆生功德種、能与人天勝果者、無過仏法僧三宝”とも言うのである。サンガの功德を讃嘆し、また四事供養を敬虔に実践する以外、サンガの尊厳を維持、護持する事、及び広大な仏教社会の基本的權益を守る事は、我々在家信徒一人一人の責任でもある。

サンガの尊厳を維持、護持する事において、マレーシア仏青総会は、国内の「偽比丘」が、日ごとに猖獗を極める事に対して、重大なる関心を寄せている。「偽比丘」の出現は、信徒をして、袈裟という僧服を着た人に出会った時、心の内に煩惱と疑惑が生じ、元々あった敬いの気持ちを萎えさせてしまう。

ある種の「偽比丘」は、如法に行動しない。その為、状況や事情をよく知らない人々に、仏教における、マイナスのイメージを齎している。仏教の信徒は、仏教を維持・護持する為に「偽比丘」に対して行動を起す・・・例えば警察に知らせて逮捕してもらう等、そのような事をすれば、事情を知らない公衆に、「サンガの中に、法を犯し、規律を乱す、多くの出家者がいる」という誤解を生じせしめてしまう。

また、我が国は、僧侶の身分を審査・鑑定する法律がない為、政治的に、または国家の行政力で偽比丘に対応する事は、真正の僧侶に不必要な制限を要求するという、望まぬ反作用を齎してしまう。故に、我々は、効果的で、後遺症のない方法でもって「偽比丘」問題を解決しなければならないと、考えており、それは、我々の信徒や、広大な社会的人士に対して、如何にして、真正な比丘と偽比丘との違いを判別するのかという、その方法と、正しい供養の仕方を教育する事だと考える。

「偽比丘の見分け方」一書は、ここにおいて、円満に出版された。

これによって、信徒及び社会的人士が、仏教の制度、特に僧侶たちの托鉢、化縁を  
実践する事への認識を、新たにして頂けるものとする。我々は、正確な護法と僧侶の  
供養への観念が普及したならば、「偽比丘」はその利益を貪ることができなくなり、自  
然に消滅するものと期待し、信じるものである。

マレーシア仏教青年總會

## 偽比丘の見分け方及び護持指南

---

### まえがき

近年の社会は、不法の分子が、仏教の出家と自称して、あちらこちらに出没して、  
詐欺行為を繰り返す事が日増しに流行し、一つの社会的問題にまで発展している。特に、  
マレーシア西部の都市部が、最も被害が大きい。偽比丘に最も多くみられる技法は、繁  
華街で托鉢する時に、市民または観光客に金品を要求し、また各種の仏教の法物を販売  
したり、また、仏教の名義を借用して、公衆に対して善意の募金を集めたり、またその  
他の、金品をだまし取るなどの、多くの非法活動をすることである。出家の僧侶たちは、  
仏教の三宝の内の一つであり、また、仏陀の教えが絶えないように、仏法を宣揚する上  
で、非常に重要な役割を担っている。

偽比丘の事件が発生する事は、僧侶方と、仏教界の尊厳、正信にとって、大きな衝  
撃となり、人々をして、仏教に対して良くない印象を齎すことになり、その事によって、  
人々は、仏教を排斥し、仏教から離れ、仏教を誹謗するようになる。そのため、三宝の  
上において、善き縁を結び、幸福の種を植える因と縁を断つことになる。偽比丘の詐欺  
事件がたびたび報じられるようになって、多くの人々が詐欺にあっている事が露呈し、  
その為、多くの市民は、37が21なのか、22なのかをお構いなく（=事の道理をよく  
考えないまま）、出家者を見かけると、ただちに反感を覚えるようになった。

その為、正常なる、真正の僧侶が行脚して村に入って、一日の主食を乞いに托鉢す  
る時、出家者に対する躊躇いがある為、間違えて偽比丘に布施する事になるのではない  
かと危惧して、民衆は、食物を布施したくないと思う。そのために、福田に福の種を蒔  
く好機を逃してしまうのである。

この状況は、社会の善意の人士が被害者になるだけでなく、戒行が清浄な、出家の動機が聖潔な僧侶方もまた冤罪を被り、乞食托鉢する時に状況をよく理解しない民衆によって色眼鏡で見られ、また無礼な態度を取られる時もあり、結果、無辜な人々が、潔白の僧侶に悪業を為す事になってしまうのである。

偽比丘にとって、マレーシアは大いなる「托鉢天国」である。この種の紊乱現象は、主に、不法の輩が、大部分の民衆が、仏教の教義と出家者の戒律について一知半解な事、また、迷信を信じる人の中で、ある種の儀式を喜んだり、聖物、例えば舍利、仏歯、仏画、開眼法物等に庇護を求めたりするのを利用しているのである。そうでなければ、不法の輩が、機に乗じる事はできないはずである。

また、現代社会は忙しい為に、多くの善人は、金銭を布施するのを好む。彼らは、金銭を布施するのは、便利で省力的な善行であると考え、もし、金銭を要求する出家者に出会うと、彼らはまったくの躊躇なく、非常に豪快に、布施をする。

現地のいくつかの仏教寺院自身も、時々、短期出家の活動期間を利用して、集団で外出し、托鉢する事があり、その時、信徒たちからの金銭による供養を受けることがある為、そのことが、よけいに偽比丘の邪な気風を増長する事になっているのである。こちらの家では消火に努力しているのに、あちらの家では、火に油を注いでいるような状況がある為、これらの仏教寺院または団体の行為が、民衆を更に混乱させ、往々にして、教育の効果を半減させてしまうのである。

これらの偽比丘の多くは外国人で、非法の集団が背後にいる事が多い。彼らは、海外からマレーシアに来て金儲けをしようとし、ただひたすら、民衆の善意と無知を利用して、財をなそうとするのである。こうして、因果を恐れない不法の輩が陸続として、“地獄の決死隊”に加入して、ともども地獄行きの列車に乗って、進むのである。

実際、偽比丘による金儲けという社会問題を杜絶させる為には、正信の仏教教団と法的機関が”偽者を打つ”という努力を続ける以外に、最も根本的な方法として、その元を断つ必要があり、それはすなわち、広大な民衆への教育である；

### ” 偽比丘とは何か？ ”

掌は片手では音が出ない。

もし、民衆が出家者の戒律と出家の真正な目的を知り、その上に、最も原始に近い仏教について深い理解を得る事ができたならば、これらの社会を汚す悪風・・・偽比丘の民衆への加害の技術は、これ以上押し広げる事はできず、これ以上被害が深まる事を防ぐ事ができ、多くの善人の慈悲心は、濫用される事がなくなり、菩提の種もまた、不毛の土地に蒔かれる事がなくなる、と信じるものである。

偽比丘が人々の注意を引いて、仏教の名目を利用して詐欺を働いて、金もうけをしようとする悪風を杜絶する事は、一朝一夕で完璧に完成させる事はできない。とはいえ、護法の心、敬愛心の篤い正信の仏教徒の方々が実践できる事は、己自身の本分に見合った所の、己自身の力量に基づいて、偽比丘の見分け方についての情報を、皆に伝達する事である。

上述の事柄は、如法の仏教と僧侶方を護持したい、今現在、聖潔の生活を送っている出家者を護持したい、円満な清浄・梵行の中で真正に努力している僧侶方の清らかな名誉を守りたい、また、同時に、非法の力が正法を破壊する事、破壊の衝撃から仏法と僧侶方を守りたいという、赤子の心から出発する事を申し述べておく。

## マレーシアの仏教

---

マレーシアの仏教は、北伝仏教と南伝仏教の、二大体系に分かれる。北伝仏教は主に”大乘仏教”または”菩薩乗仏教”と呼ばれ、その依拠する経典は、古代インドの雅語梵文（Sanskrit）を用いて書かれた経典と、西域文字で書かれた経典である。北伝仏教は、その経典に使われた言語体系によって、漢語系仏教と、チベット語系仏教とに分ける事ができる。チベット語系仏教は、”チベット仏教” ”チベット・モンゴル仏教”とも呼ばれ、俗称では”ラマ教”とも言う。南伝仏教は、インドから、南のスリランカに向かって伝承されたものを言う。

教義の上では、南伝仏教は、仏教における上座部仏教の系統を継承し、仏陀と声聞弟子たちの教えと行持（＝具体的方法）によって、修行生活を送っている。その為、”上座部仏教”（Theravāda）、または”声聞乗仏教”と呼ばれる（小乗仏教と俗称される事もある）。南伝仏教が使用している経典の言語は、パーリ語に属しており、故に”パーリ語系仏教”とも言う。南と北で伝承された仏教は、共に仏教の主流であると公認されているが、しかし、各自が伝承し、依拠する所の経典が異なる為、マレーシアでも、異なる仏教の系統の僧侶たちが、多元化された仏教の特徴を展開する事となった。例えば、戒律の保持の仕方、袈裟の違い、サンガの護持の仕方など、皆それぞれ異なっている。ここでは、北伝と南伝の違いを述べるのではなく、南伝仏教パーリ語系の経と律に依拠して解説する。

### 南伝の出家者は、なぜ托鉢しなければならないのか？

物質文明が発達した今日においても、上座部南伝の出家者は、仏陀ご在世の当時に制定された行動規範に基づいて、三衣一鉢の生活を送っており、家々を回って、托鉢乞

食をする。過去、現在と未来の諸々の仏世尊はみな、托鉢乞食によって命を活かしたのであって、故に、外出して托鉢するのは、南伝の出家者が、仏陀の制定した、正しい命の活かし方であり、また、南伝の出家者として、実践しなければならない義務でもある。托鉢乞食は、四聖種の中の一つである。

四聖種の意味は、出家者は、飲食、袈裟、住居、医薬という、この四種類の生活必需品に関して、（+どのようなものにも）満足しなければならない、という事である。南伝の出家者に関して言えば、托鉢は修行の一種である。

出家者は、病気の時以外は、家族でない者、または血縁でない者に食べ物を要求してはならず、施主が布施してくれた、どのような食べ物にも満足しなければならない。托鉢の実践は、驕慢を降伏する事もできる。というのも、出家者は、己の生活に必要な衣、食、住、薬はみな、施主による布施に依存しなければならない事を知って、己には、何等自慢するべきものがないと自覚するからである。

出家者が外出して托鉢乞食するもう一つの意義は：

出家者が外出して乞食すれば、施主は布施をする事によって、善業を積むことができる。広大な民衆が三宝と善縁を結び、己の未来の為に、離苦得楽の善因を蒔く機会を与える事ができるのである。同時に、出家者も托鉢を通して、仏法を宣揚する事ができる。このように、托鉢乞食は、仏陀と諸々の阿羅漢が遊行して弘化する事を通して、広大な民衆を仏門に導く伝統的な方式なのである。

追補：出家者とは、沙弥（sāmaṇera）と、227戒を具足する南伝比丘（bhikkhu）を指す。



## 如何にして偽比丘を見分けるか

---

仏陀が涅槃して 2000 余年の今日、僧侶が外出して、家々毎に托鉢する風景は、いまなお見ることができる。緬甸（ミャンマー）、タイ、スリランカなどの地では、その光景を毎日見ることができる。現在のマレーシアにおいて、多くの出家者は、寺院内部で膳食の供養を受けているが、しかし、一部の出家者は、四方に雲遊することがある。

また、遠くタイからやってくる出家者もいるし、山の洞、森に住む出家者、及び出家の義務を厳しく守ろうとする南伝の出家者は、一日分の食糧を、托鉢の形式で得ようとする。南伝の出家者が外出して托鉢する時、いくつかの儀礼的規範があるが、それは仏陀が出家者に守るよう規定したものである。

それはたとえば：

●南伝の出家者の学処である所の衆学法（*Sekhiyā dhammā*）によれば、出家者が俗人の居住区に進入する時、必ず衣を正しく着用しなければならない。すなわち、袈裟は通肩とし、肩を露出しない事によって莊嚴を示す。

●托鉢の時、病気でない限りは、南伝の出家者は一律、裸足で歩かねばならない。南伝の出家者が托鉢する時、在家（浄人）が付き従うことがあるが、当該の者は、出家者に代って食物を受け取る事が出来る他、公衆に対して、出家者に如法に布施する方法を伝達する事ができる。

●南伝の出家者は、托鉢の時、行儀（＝行い）に対して、非常に注意を払わねばならない。歩く時も、供養を受ける時も、視線を下に向ける。歩く時はゆっくりと歩き、高い声で笑わない、身体を揺らさない、肩を揺らさない、頭を振らない、手を腰に当てない、頭を覆わない、俗人の家の周りを爪先立って歩かない、等である。托鉢する時、南伝の出家者は、俗人に合掌したり、挨拶してはならないし、如何なる怪異な行動もってはならない。例えば、鉢を叩く、わざと咳をする、口の中で呪文、呪語を誦る。鐘や太鼓を叩く、鉢の中に物を入れ、それをゆすって音を出し、それでもって公衆の注意を引く等である。

同時に、公衆に ”まわりついて” 布施を要求してはならない。南伝の出家者は、托鉢の時、ただ静かに公衆から己が見える所に立って、人々が供養してくれるのを、黙々と待たねばならない。誰も食べ物を供養してくれない場合は、ゆったりとした足取りで、温和な気持ちで、そこを離れなければならない。

●真正なる南伝の出家者は、托鉢の時、決して人々に ”自己紹介” または ”自己推薦” などはしない。更に多くの供養を得ようとして、施主に己の品德、戒行または修行



(+の内容)をひけらかしたりしない。というのも、これらの行為は、出家者の出家生命に対して、嚴重な脅威になるからである。

もし、出家者が、名誉と利益を得たいが為に、己はすでにある種の上人法(注1)、またはある種の神通を得ていると、嘘をついて宣揚するならば、彼は取り返しのつかない、救う事のできない断頭の戒を犯した事になり、即刻、袈裟を脱いで、還俗しなければならない上に、終生、再度出家して、南伝の比丘戒を受ける事はできなくなる。

(注1) 上人法(uttarimanussadhamma: 過人法とも。常人の能力を超えた事とそれを証明する事。ジャーナ、解脱、定、等至、智見、修道、証果、煩惱の断滅、心が蓋を離れる、静かな所で楽しむ、を言う)

否定できないのは、出家者が完全に、上に述べた所の、すべての托鉢の振舞い・行いを満足させたとしても、我々は、彼が真正の出家者だと、自信をもって判断できない、という点である。偽比丘の集団は、非常に専門化しており、彼らは寺院に人を派遣して短期出家し、一人の出家者としての、必要不可欠な振舞い・行いを学んだ後、還俗して、その他の不法の輩に、比丘の振りをする為の教育をするからである。

故に、外観からみて、この出家者が本物かどうかを判断する事は、たとえ資質と教養のある仏教徒であってさえも、見誤る事があるのである。しかし、偽比丘が形式的に、比丘の模倣をしても、出家者としての真正なる人格的内容は無いのであって、このことから、出家者の真贋を見分けるのは、難しい事でもないのである。

最も重要な事、すなわち真贋の判別の為の、もっと確かな基準とは、

Yo pana bhikkhu jātarūparajataṃ uggaṇheyya vā uggaṇhāpeyya vā upanikkhittaṃ vā sādiyeyya, nissaggiyaṃ pācittiyaṃ. (Nissaggiyapācittiyā 18)。

もし、比丘が金銀を触り取るならば、または(+人をして)触り取るようにさせるならば、または近くに置く事に同意するならば、捨墮である。(尼薩耆波逸提 18)

●真正で如法の南伝の出家者は、托鉢の時、決して金銭による供養を受け取らず、ただ食べ物の供養だけを受ける。同時に、真正で如法な出家者は、如何なる品物であっても、例えば黄繩、彩線、仏珠、仏札、仏教カード、しおり、お守りなどを、金銭の供養の取引に使うことはない。どのような場面、どのような場所においても、南伝の袈裟を着ている人が、鉢でもってお金を要求したり、または黄繩、彩線、仏珠、仏札、仏教カード、仏像、符、経呪の念誦、水を掛けて祝福する等の行為をして、それをもって、公衆に対して、金銭の供養をさせて、それを受け取ろうとするならば、それは偽比丘である!

それがたとえ真正な出家者であったとしても、その比丘は、すでに出家者の本分と戒律に、違反しているのである。

●（+出家者が）托鉢をする時、お金を受け取る事が出来ない以外に、真正で如法の南伝の出家者は、どのような目的であっても、己の為、他人の為、群衆の為、サンガの為、何かの道場や寺院の為、仏教団体の為、または仏菩薩の名目でもって、公衆の人士に募金を要求してはならない。どのような時であっても、どのような目的であっても、役所の募金許可を取っていても、取っていなくても、あらゆる公開の形式でもって、公衆の場所で、民衆に募金を募る南伝の出家者は、すべて如法ではなく、または、偽比丘の可能性が大いにあるのである。

●すべての南伝の出家者は、過午（＝正午以降）不食戒を守らねばならない。早朝7時か9時ころまで、南伝の出家者は、人の集まる所、例えば市場、レストラン、喫茶店、小規模な商店などで、托鉢乞食をする。ここで言う所の”正午”とは、12時ちようどを言うのではなく、太陽が真上に来た時を言う。もし、タイの伝統に基づく出家者であれば、タイの正午を根拠とする為、マレーシアの12時になると、即刻食事を止める。その他の伝統に基づく南伝の出家者は、マレーシアの真正の正午（＝太陽が真上に来る時間）により、それはだいたい一時から一時半の間、という事になる。具体的な時間は、季節によって調整され、時には、もう少し早くなる事もある。

真正で如法なる南伝の出家者は、正午以降に托鉢乞食に出かけるという事はない。故に、正午以降、翌日の黎明まで托鉢している出家者は、病気によって薬を乞うている場合以外は、すべて如法ではなく、また偽比丘の可能性が大いにあるのである。

以下の場合には例外とする：

病気の為、南伝の出家者が午後、薬、砂糖（飴）、油、冷水、熱湯を乞いに来るのは構わない。真正な出家者（特に、森や荒野に住んでいる出家者）は、午後に俗世間に来て、自分の為、または病気の出家者の為に、病気を治す為の薬を、貰いに来る事はある。勿論、南伝の出家者は、如何に病気が重くても、施主に金銭を布施して貰って病気を治したり、薬を買ったりはせず、ただ施主が許可し、布施した薬を受け取るのみである。

これらの戒律を理解した人々は、午後、または夜間、人が集まる場所、例えば夜市、商業施設などにおいて、金銭を布施するような如法でない行為をしてはならないし、助紂為虐（＝悪人を助けて悪事をなす）になるような行為・・・偽比丘に布施をしてはならない。

Yo pana bhikkhu nānappakāraṇaṃ rūpiyaṣaṃvohāraṃ samāpajjeyya,  
nissaggiyaṃ pācittiyaṃ. (Nissaggiyapācittiya 19)

もし、比丘が各種の金銭の取引（＝取引）をするならば、捨随である。（尼薩耆波逸提 19)

●南伝の出家者の戒律において、出家者は金銭を受け取れないだけでなく、身体的にも、どのような金銭をも、所持することができないし、また金銭、財物を、己自ら処理したり、使用したり、支配したり、管理したりする事も、できない。

ある種の状況がある場合：

たとえば、出家者がある場所に行って弘法する、巡礼する、または参学する時など、真正な南伝の出家者は、臨時にホテルに泊まる事も、あるかも知れない。しかし、これらの出家者は、通常は、在家の男性または浄人が、道々、出家者を護持しており、ホテル・宿舎、食事、必需品、旅費等一切の費用は、在家が処理するのである。もし、ホテルに長期的に宿泊する南伝の出家者で、己自身でホテルの費用を払う、または己自身でレストランに行って食事をする、または商店に入って物品を購入する、たばこ、酒、日用品等を買う、己自身で費用を払ってタクシー・バスに乗る、または己自身で、交通道具（車両）を運転する等の状況を見つけたならば、それは如法ではない。彼らは、大いに偽比丘の可能性がある。

●病気の治療、パスポートやヴィサの手続き、在家からの要請を受けての弘法、公益的な、慈善活動への参加、病人のお見舞い、臨終者への読経と助念など、どうしても必要な事情のある場合以外、真正で如法なる南伝の出家者は、午後、俗世間に入って行く事はしない。

特に商業地域、ショッピング・センター、銀行、宝くじ売り場、賭博場、娯楽場などなど、欲楽、商務、賭博性の充満する場所に出かけないようにするべきであるが、それは、出家者の威儀と名声を維持し、守る為であり、必要のない非難、咎め、疑惑と嫌疑を引き起こさないようにする為である。

身体に一文も持たず、名義的にも恒産を持たない南伝の出家者が、どうしても必要があつて、このような敏感な地域に出かけなければならないとしたら、通常は、在家か浄人が同行するものであつて、日程・スケジュール全体は、在家または浄人が掌握する。

身体上に金銭を所持しないが故に、真正なる南伝の出家者は、決して商店に出かけて”買い物”したりしないし、感官の欲楽に満ちた場所で、歩き回る事はしない。

以上の事から、我々は以下のような総括をする事ができる：

一人の出家者が、本物であるか偽者であるかを見分ける、非常に単純な方法は、

<比丘に金銭をあげてはならない>である。

先の述べた幾つかの理由によって、何が如法であるか、何が如法でないかの、区別の基準を示した。このことを理解すれば、南伝の出家者が ” サンガ証明書 (出家証明書) ” を所持しているかどうかは、重要でなくなる。真正なる出家者は偽者になれないし、偽の出家者は、真正なる出家者になれない。

(+在家が) 如法に供養すれば、偽比丘も本物らしくなる ;

(+在家が) 如法でない供養をすれば、真正の出家者も偽者に見える。

もし (+我々が) 、出家者が托鉢するのを見かけた時、心に功德を積みたいと思うものの、相手の真贋を見極める事ができないで困惑するならば、食べ物 (+だけを) を供養すればよい。このようにすれば、真正なる出家者は、金銭戒を犯す機会がなくなるし、偽比丘は、仏門の袈裟を借りて、悪事をなす事もなくなる。我々は、偽比丘が布施してもらった食べ物を金銭に替える事はないと、信じている !

相手が真正であるか、偽者であるかは兎も角、その人をサンガの代表として、如法に食べ物を供養するのであれば、サンガに供養するという殊勝なる功德は手に入るし、同時に、偽比丘の杜絶に少しばかりの努力を払って、正法が久しく住むように (=留まるように) との心からの護持の功德も得る事ができ、わずかの骨折りでありながら、得られる後福は無量であるに違いない。

マレーシア青仏会は、多くの正信の団体に呼びかけて、仏教徒と社会的人士が、どのような場面においても、もし偽の比丘、偽の出家者、不法の輩が、民衆に金銭を乞い、または詐欺の手法で募金などをするのを発見したならば、即刻マレーシア青仏会に連絡して頂きたいと思う。

マレーシア青仏会の構成組織は :

青仏会・・・(略)・・・金剛乗会等を含み、これらの組織は、マレーシア仏教会と協力し合って、偽比丘を法において糺す為に、厳格で迅速な行動を取るように取り決めた。仏弟子たちと公衆の人士は、お互いに勇躍協力し合い、金銭を (+布施するのを) 拒否し、偽比丘を告発し、偽比丘が公衆の善意を利用して、詐欺をして利益を貪り、仏教とサンガの形象 (=様相) を破壊するのを防がなければならない。

仏陀の正法によると、律に基づき、出家して修行する南伝の出家者は、戒に依り、その抑制 (+力によって) 、邪命を習行 (=習慣的な行為) する事を避けるのである。心の聖潔は、世間から出離するもので、八聖道と合わせて精進する事によって、将来において、道・果を証悟するのが、最終的な目標である。正命で生きる事は、出家者の最も重要な責任であり、出家者は、邪命の方式で生活をしてはならない。

邪命とは、詐欺、嘘、わざとらしく振る舞う、示威する、利益を求める等の諸々の悪法によって生活を維持する事をいい、それはすなわち、智者の譴責する所の生活方式でもある。

活命（＝命の活かし方）が清浄で、戒に依り、自らを律し、正しい行為と行処を具足する南伝の出家者は、金銭の授与は禁止されており、欲楽の享受を克己し、お酒を飲む事もなく、たばこなどの諸々の麻酔する物品を使用したりせず、（+身体を）飾らず、美化する事もない。

出家者は、歌舞音曲を避ける。例えば、TVのドラマなどの娯楽的な演劇を見ず、音楽の演奏を聴かず、舞踏、芸術展覧、マジックの演技、スポーツ、閲兵、軍事演習などを見ない。

出家者は、貴重な光陰を諸々の、不適切な遊戯や賭博・・・例えば将棋、麻雀、トランプ、ボール遊び、あてももの、口笛、カラオケ、ダンスなどの下劣な行為に浪費する事なく、噂話や戯論や論争や弁論に時間を使わない。

（中略）

仏陀は、出家者に拳の練習をする事を禁じており、南伝の出家者は、苦の滅と関係のない学芸を学んではならない。武芸を学ぶのは、出家者にとっては、邪命となる。これ以外に、仏陀は、出家者が信徒のために使い走りをしたり、情報の伝達をするのを禁止している。

仲人、物品の売買、手相を見る、財運を予測する、予兆の占い、占星術、八卦術、吉凶の予測、夢解析、気象の予言、吉日の報せ、風水、悪魔退治、媚薬媚術、超度、呪文、巫術、護摩、神頼みを禁止している他、出家者が国家の為に戦略的顧問、政務国師になる事、練丹、医療行為などなどの一切の詐欺法術、低級な技芸による邪命も、禁止している（詳細は《長部・第二経・沙門果経》参照の事）。もし、この種の邪命を離れる事ができたならば、すなわちそれは、活命遍浄戒である。

## 出家者の責務

---

「準陀。己自身が、すでに沼に落ち込んでいるというのに、その他の、沼に落ち込んでいる人を救えるなどという事は、決して無い！

準陀。己自身が、確実に沼に落ちていない時、その他の、沼に落ちた者を救う事ができる！・・・」《中部・減損経》

南伝の出家者の、唯一真正なる任務とは、戒・定・慧の三つの増上学に精勤・修行し、内心の泥濁を取り除くよう努力し、聖道と聖果をば成就して、三界の衆生を利益する事である。その他に、出家者は、仏法を住持する責任がある。仏法の住持とは、三蔵聖典の学習をして、仏陀の正法を伝承し、人の利益のために説法し、衆生にも真理が理解できるようにせしめ、自然界の法則に従って、正業と正命の生活をする事である。

出家者は、高尚なる、聖潔な梵行の生活を送ることを通して、心智を育成し、同時に仏陀の正法、律の実践を通して、仏法を宣揚して社会に報恩をし、人と天の応供として、また精神的指導者として、自利と利他に生きなければならない。正法の宣揚と、その後代までの伝承は、三つのレベルの事柄に依拠しなければならない：

すなわち、  
教理 (pariyatti) 、  
修行 (patipatti) 、  
体験・証悟 (paṭivedha) である。

単に、教理によるだけでは、正法を久しく住めさせる事は出来ない。ある種の人々が、生命と精神力を投げ出して、仏陀の教えた法について、自ら印証する為に、実際の修行に取り組みねば、それは保証されえない。

出家者は、己自身の青春と生命を仏法に捧げた専門職の修行者であり、彼らは衆生に対して、何時の世も、命を昇華せしめ、浄化する事が出来るのだという希望を実際に見せ、また、人々に、仏法は、修行して証悟する事ができるものなのだ、という事を、実際に見る事ができるようにするのである。仏陀の教えを伝承する為の、サンガの使命とは、仏陀の教法、随法、見法を實踐し、法を体験・証悟し、八聖道を實踐する事である。この世間に八聖道を實踐し続ける人がいさえすれば、この世間には依然として、四双八輩の聖者が存在する事ができる；

この世間に聖者がいさえすれば、正法は引き続き久しくこの世に住む事ができる。衆生の幸福の為に、サンガは、仏陀の遺産の継承者のようであり、正法が 5000 年続くよう、神聖なる使命を背負っているものである。これが、サンガが、なぜ、この世間で無上の福田であるのか・・・なぜ、個人への供養が、サンガへの供養に、永遠に及ばないのか、という理由である。

在家の信徒衆は、出家の修行者に、衣服、飲料・食物、住居、医薬品などの、日常生活における必需品を供養・布施して、物質的な方面において、出家者を支援する。そして、広大な信徒衆への謝恩として、仏陀は、出家者は、言語と行動の上において、人と天の教師となり、道徳的模範となり、心霊上、信仰上においても、在家に対して、援助と励まし、頼りになる支えとなるべきであると、言っている。

出家者は、在家信徒衆の精神的指導者であり、また心理的な医師でなければならない。故に、南伝仏教の出家者は、戒律を厳しく保たねばならないだけでなく、止・観の修行に励み沈潜し、仏法の伝承を保持する以外に、適切な時と方法でもって、在家の俗人に対して仏法を宣揚し、多くの迷惑者（＝迷っている人々）を導かねばならない。

この世界で、最も困難な仕事とは何かと問うたならば、それは、一つの良き福田になる仕事こそ、世界で最も困難な仕事であろう、と答える事ができる。何故か？

というのも、一つの良い福田になるという仕事は、己自身に打ち勝ち、内心の貪・瞋・痴を克服し、悪い習気を克己し、己自身の好き嫌いに逆行して、散乱する心念を調服し、捨て難きを捨て、行じ難きを行じ、忍び難きを忍ぶ必要があるからである。

これは、なぜ、仏陀が《法句経・千品・103偈》で、戦場において、100万人の人々に打ち勝つより、己自身に打ち勝てる人間をば、讃嘆したのか、という理由でもある。というのも、己の頭髪、金銭、肉親の情、晚餐、欲楽を犠牲にして、良き福田になる為に、（+修行に）励もうとする人は、まったくもって、この世には、いないからである。

故に、この世間に、良い福田が存在するという事は、非常に希な事であり、得難い事なのである。好い福田のない世間では、一人の、非常に善を楽しみ、布施を好む善人が、毎日布施する食物の長さが何十、何百 km あっても、その果報は、一つの良い福田に、たった一匙のご飯を布施する場合の果報の、その何千万分の一にも及ばないのである！

こうした事から、出家者の任務は、黙々として、良き福田となる事であり、誰も履行したがない、神聖な義務を履行する事である。その為、出家者には、世人に敬われ、供養され、奉じられる価値があるのである。たとえ、一人の清浄なる出家者が、積極的に説法して利生（＝衆生を利益する）しない事があっても、（+彼が）ただ、人々の供養する食物を食用するだけであっても、人々が提供する所の奉仕を受け取るだけであっても、この世間において、大きな利益を齎すものなのである。

## 後記

---

偽比丘が、マレーシアの社会において詐欺を行う事象には、すでに警鐘が鳴らされた。民衆の幸福の為に、また、偽比丘への憐憫から、サンガは、この事に無関心ではいられないし、何事もなかったように、見て見ぬ振りをする訳にもいかない。偽比丘の振舞いが、衆生の幸福と利益にとって、将来にまで影響する為、適当な時期にサンガはこの問題に対して、己の立場を表明し、かつ、適切な行動を取って、これら（+の現象）を退治する為に、各種の提案をするものである。（中略）

南北の仏法を伝承し、同じ立場に立つ所の仏弟子たちへ；

筆者は想う：仏教を愛護し、聖賢なる僧侶方を護持したいと願う仏弟子たちは皆、不法の輩が出家の身分を偽って、仏教の名目を利用し、不法で恥知らずな醜聞をまき散らす事が何度も報道され、その為、民衆の間において、食事の後の風刺や笑い話にされるのを、見たいとは思わない。因果業力の法則から言えば、我々は、少々の、短期的な利益の為に目がくらみ、重大な悪をなして、己自身に対して、長期間の不幸と苦痛を齎す所の、不法の悪をなすこれらの輩に、憐憫するものである；

たとえ今生では、現有の法律によって制裁される事がないとしても、業力の法則による懲罰から逃げる事はできない。

仏陀は言う：

「偽の出家者は、実は”断頭戒”を犯しているのであって、一生のうちに、比丘戒を受ける資格はない。この種の偽出家者の、不義の財をかすめ取る悪業は、今生の臨終の間際に熟し、彼らを地獄へと生まれさせ、非常に長期に亘って、苦しみと試練を味わう事になる」と。

仏陀は《増支部・七集・火蘊譬喻經》の中で、以下のような比喻を、述べた事がある。

「比丘たちよ。私はあなた方に告げる。一人の破戒した、悪性の、己の為した事柄を隠蔽する、非沙門でありながら、沙門であると言い、非梵行者でありながら、梵行者であると言う者、そういう内心が腐敗している者は、強壮な人によって、真っ赤に焼いた器具を使って、口を開けさせられ、真っ赤に焼いた鉄の玉を口に入れられ、彼の唇、口、舌、喉、胃が焼かれ、次に（+鉄玉が）腸や横隔膜を通り、肛門から出てくるのはまだいい方とする。何故であるか？

というのも、彼は死に至る苦痛を受けるだけであるか、または死ぬのと同等の苦痛を受けるだけであるから。彼は、身体が壊れ、命尽きる時、悪趣、危険な場所、地獄に生まれる事はない。しかし、比丘たちよ。一人の、破戒し、悪性で、己の為した事柄を隠蔽し、非沙門でありながら沙門であると言い、非梵行者でありながら、梵行者であると言う者、そのように内心が腐敗している人が、信徒が供養する食物を食したならば、彼に長期間の不利を齎す。彼の身体が壊れ、命終える時、彼は悪処、悪趣、危険な場所、地獄に生まれる」

慙・愧がない、破戒をする真正の出家者が、熱い鉄の玉を飲まされたとしても、（+偽比丘が）人々の供養する食物を食べるよりは、まだましである、と（+仏陀は）言う。我々は、一人の、袈裟を借用して、一滴の慙・愧の心なく、善信徒たちが供養した金品をだまし取る偽比丘は、一体将来において、どのような悲惨、悲痛な果報が待っているのか、想像がつかないくらいである。



彼らが、己の行いにあるべき尊厳を無視・軽視する事に対して、我々は遺憾と憐憫を感じるが、またそれ以外に、仏弟子を自認する我々は、大衆に向かって、出家者の真・贋を判別する為の情報を広報し、彼らが二度と、仏門を利用して悪事をなす事ができないようにするべきだ、と考える。

一人の出家者が、常に、真に、両袖清風（＝清廉潔白）であり、社会の民衆が、出家者の戒律と托鉢の真実の意義を知ったならば、ある者が偽比丘になったとしても、それは、何等の利益のない ” あきない ” になるに違いないし、そうであれば、人は嘘までついて、錬財などするであろうか？

こういう状況であれば、心が不良である人が、食を得る為に、仏門に混じり入りたいと思うだろうか？

出家者に金銭を布施したがる人々は、以下のように考えるかも知れない：

相手が真正でも偽者でも、一粒の善心でもって金銭を布施するならば、なんの問題もないだろう。

しかし、このようにすれば、無形の内に、不法の輩が地獄へ行く悪業を支援している事になり、相手を墮落させているのであり、同時に（+このような無明の行為は）、仏陀によって、衆生が苦から離れ、楽を得られるようにと教えられた正法の、没落・衰退する趨勢が加速される事に繋がるのである。

兜率天サンガから居士団体への提案

- 1、携帯を使って、偽比丘の情報を広報する。
  - 2、実情を新聞に載せて、大衆を教育する。
  - 3、この本の内容を、メールであちこちに転送する。
- これは一種の ” つなひき ” 、戦いである。

サンガと信徒は、心を合わせて協力し合い、共に手を携えて、サンガはサンガの本分を尽くし、護法の信徒もまた、己の本分を、尽くして頂きたい。サンガの本分としてできる事は、更に積極的に外出して托鉢し、自ら身を以て民衆の教育をする：

比丘は、托鉢する時、金銭を受け取らない！

居士信徒は、己の能力に従って、口伝えに、または IT を利用して、これらの情報を伝達する事。これは、非常に簡単にできる善業であり、伝達する内容は、＜出家者に金銭を供養してはならない＞という情報だけである。

表面的には、民衆に対して、（+出家者に）金銭の布施をしてはならないと教えているだけであるが、しかし、実際には、護法しているのであって、正法が久しく住まる

ために、己の力を献じて頂ければ、未来において、離苦得樂できるよう、己の善縁を増長せしめる事ができる。（中略）

もし今後、マレーシア政府が、偽比丘への対応として、出家者全員の托鉢を禁止したならば、緬甸（ミャンマー）の禪師、タイの高僧、台湾の大法師の方々は、マレーシアに入国して弘法し、禪を教える事ができなくなる。その時、我々マレーシアの市民と後世の子孫は、非常に大きな損失を被る事になり、それは今世の損失だけではなく、未来における、長期に亘る損失となる。

世人の道徳的模範、精神的指導者、無上の福田である聖賢の僧侶方は、一たび、この地において善法を蒔かず、善根を育成せず、社会の癌細胞—— ”断滅見”（注1）の拡散を抑止しなくなれば、無数の衆生は、福田において、福業を育成することが出来なくなる。この事は、我々に、朝の明けない長い夜が近づいている事を意味するのである。あなたと私、共に手を携えて、仏教の尊厳と形象を守る事は、衆生の長きにわたる幸福と利益の為の、我々四衆弟子の責任なのである！

**Don't be conned eliminate the bogus monks.**

（注1）断滅見：

- 1、無因論—苦樂は無因であるという論。
- 2、無作用論—善をなしても、悪をなしても、果報はないという論。
- 3、虚無論—死後には、何もなくなるという論。



## 付録 1 南伝出家者托鉢への布施・供養について

どのような時でも、どのような場所においても、南伝の袈裟を着た出家者が托鉢するのを見て、何か布施か供養をしたいと思った時、決して、現金を鉢の中に入れてはならない。鉢は、出家者が食物を受け取る為にあるものであって、己の年老いた父母の為に托鉢するのであっても、何かの理由で、死にそうな状況であっても、鉢は、現金を受け取る為に使われる理由を、全く生じない。南伝の出家者が托鉢する時、施主は、己の経済力と好みに応じて、何らかの主食または副食——肉類や菜食（＝精進料理）等を供養する事ができる。出家者に供養する肉類は、三淨肉と、仏陀が許した肉類に限る。また同時に、果物、お菓子、ビスケット、スイーツ等を布施してもかまわない。これ以外に、南伝の出家者には、午後の果汁、仏陀の許可した 7 日薬、終生薬と混合薬を布施してもよい。

午後の果汁 (yāmakālika) は、非時果汁とも言い、一日の内に飲んでしまわねばならない果物のジュース、または煮ていない野菜のジュースを言う。南伝の出家者は、午後になると食事をしないが、午後から翌日の黎明の前まで、出家者は喉の渴きを、果汁を飲んで癒す事はできる。《律蔵・薬篇》では、穀果物の果汁、煮た野菜のゆで汁と蜜花のジュースを除いて、小さな果物、例えば葡萄、リンゴ、マンゴー、バナナ、オレンジ、レモン、レイシ等、すべての葉のジュース、すべての花のジュース及びすべてのサトウキビのジュースは、絞って非時果汁とすることができる、としている。律蔵の註釈によると、九種類の大きな果物と一切のその他の穀物は非時果汁として絞ってはならない、と言う。

この九種類とは：

- 1、椰の実。2、棕櫚の果。3、波羅蜜の実。4、パンノキの果実。5、ひょうたん。
- 6、まくわうり。7、冬瓜、パパイヤ、かぼちゃ、スイカ、メロンなど。8、キュウリ
- 9、きゅうり。

非時果汁の製造方法は以下の通り：沙弥または在家など、具足戒を受けていない人が、ジュースにしたい小さな果物を押しつぶして、その後に布でろ過し、残渣と分ける。ろ過したジュースは湯冷ましで希釈した後、砂糖を入れるか塩を入れるかして飲む。火の通った野菜の汁とジュースは、午後、飲用できない。しかし、太陽の光の下においておき、温めたものは、飲んでもよい。現在、市場では、個包装のジュース、例えばリンゴジュース、オレンジジュース、ブドウジュース等が売られているが、出荷前に不明確な消毒方式で消毒されている事がある。故に、ある種の出家者は慎重を期して、午後、これらの個包装のジュースを飲まない。

非時食を離れる、という学処を受持する南伝の出家者と八戒者は、オートミール、Milo、Horlic、Ovaltine、牛乳、豆乳、小豆水、おもゆ、いも汁、チョコレート、チーズ、アイスクリーム及びオールインワンのコーヒーなども咀嚼食として、一律、非時に服用しない。

タイ仏教の伝統によると、牛乳を入れないコーヒー、ブラック・チョコレート、チーズは非時に食用してもよい。チーズに関しては、仏陀の時代、多くの乳製品があったが、チーズはなかった。タイの伝統では、チーズを油の類、すなわち、7日薬とみなした。しかし、緬甸（ミャンマー）の伝統では、この点には反対で、チーズは乳製品であるとする。もし、チーズを午後食してよい、または7日薬とするならば、牛乳やヨーグルトもまた食しても良い事になってしまう・・・しかし、仏陀は明確に、牛乳とその派生物を午後において食用するのを禁止している、と言う。

緬甸人（ミャンマー人）は、茶葉を食べ物として食するので、緬甸の伝統では、出家者は午後お茶を飲まない。しかし、スリランカとタイの伝統では、出家者はお茶を終生薬として、利用している。

7日薬（sattāhakālika）とは、南伝の比丘が、7日以内なら、手元に保存してもよく、また食してもよい薬の事。

1、バター（navanita）。2、ギー（sappi）。3、油（tela）——植物性油と動物性油。4、蜂蜜（madhu）。5、糖（phāṇita）——蔗糖、棕糖、黒砂糖、氷砂糖、砂糖等。

ここで言う”7日”とは、南伝の比丘について言ったもので、沙弥と10戒尼には、保存に関する日数の制限はない。多くの出家者は、100Plus、Sprite、7upなどの清涼飲料を7日薬としている。というのも、通常、それらの成分は、砂糖であるから。多くのタイの伝統では、チーズを7日薬としている。しかし、緬甸（ミャンマー）とスリランカの伝統では、チーズは7日薬にはならない。というのも、彼らは、それらを、咀嚼食（khādaniya）としているからである。咀嚼食とは、噛んで飲み込む食物の事をいい、午後にチーズ、ブラックチョコレート、干し梅（dried prune）または、かぼちやの種などの咀嚼食を緬甸（ミャンマー）やスリランカの伝統にある出家者に布施するのは不適當である。

タイ伝統の出家者は、午後、これらの食品を食する事はできる。終生薬（yāvajivika）は、尽寿薬とも言い、食用する期限の制限がない薬品を言う。この種の薬品は、一般的には、病気の治療に使われるものであって、食品に該当しない。《律蔵・薬篇》によると、尽寿薬は、大きく6種類に分ける事ができる。

- 1、根薬 (nūlabhesajja) : 生姜などの根。
- 2、渋薬 (kasāvabhesajja) : 印度棟渋等。
- 3、葉薬 (phaṇṇabhesajja) : 印度棟葉等。
- 4、果薬 (phalabhesajja) : 胡椒等。
- 5、脂薬 (jatubhesajja) : 樹脂、薬樹脂等。
- 6、塩薬 (loṇabhesajja) : 海塩、黒塩、岩塩等。

混合薬とは、異なる種類の薬を混ぜて、食用するものを言う。混合した後の薬は、その中の最も期限の短いものを基準として、時間を計算する。例えば、漢方薬の材料は、一般的には、終生薬に相当するが、しかし、もし、蜂蜜に混ぜたならば、7日薬となる。もし、7日薬または終生薬を、食べ物に混ぜたならば、午前に服用しなければならない。例えば、クコ、朝鮮人参、ニッケイ等の漢方の材料は、終生薬であるが、しかし、鶏肉と一緒に煮た場合は、非時に食する事はできない、等である。

南伝の出家者に供養するのに相応しくない物品としては、たばこ、酒、化粧品、香水、娯楽用品、ゲーム、武器、金銀、宝石、装飾品等がある。仏陀は、もし、人が知っていながら、如法でない物品を、わざと如来または如来の弟子に布施するならば、”非福” (apuñña) を得る、と言う。南伝の出家者は裸足で托鉢する為、三宝に敬意を表す為、施主は供養をする時に、靴を脱ぐべきであり、かつ、屈んで、自ら手に持って、供養品を出家者の鉢の中に入れるのがよい。

《増支部・五集・底甘陀品》の第147経の中において、仏陀はこのように言っている。

「以下の五種類は、善士の施である：慇懃に布施する。敬意を以て布施する。自ら布施する。捨てるのでない物を布施する。業報を信じて布施する。」

もし、布施をする時、この五法を具備しているならば、施者に、長期に亘る豊かな利益と幸福を齎すことができる。このことはなぜ、多くの敬虔な仏弟子が、出家者に布施をする時、いつも屈んで、かつ非常なる敬意をもって供養するのか、という問いの、答えでもある。実際、このような行動は、出家者が必要としているのではなく、それは施者の必要によるものである。というのも、敬意をもって出家者に布施する事は、施者本人に、長期的な幸福と利益を齎すからである。

「・・・サンガに布施する功德と果報は、計算する事ができない、衡量する事ができないものである。私は宣告する。個人に布施する功德は、サンガに布施する功德より、永遠に勝ることはない。」《中部・施分別経》

次に、もし、施者が出家者に供養をする時、その心念を多少とも調整するならば、不可思議な”転乗”の作用に到達する事ができ、布施の善業によって、未来において熟する所の果報を、無限に高める事ができる。それが、一匙の白飯であっても、少しばかりの食品であっても、非常に殊勝なる果報を齎す事ができるが、この事は ”小さな元手に万、億の利益” の効果、と言えるのである。これは、仏陀の教えし自然法則に従えば、功德の大小は、外部の形式または物質の多寡に関係がなく、施者が布施する時の心理的要素、及び施者の素質によるものである、と言える。この種の不可思議な ”転乗” 作用に到達する為には、施者は、僧侶に供養する時、心理的に以下のような素質を具備する必要がある：

- 1、供養する前、心は歓喜に満たされる事。
- 2、供養する最中、心は歓喜に満たされる事。
- 3、供養した後も、心は歓喜に満たされる事。
- 4、どの出家者に供養する時でも、心の中で以下のように思う：

私は今、サンガに供養している。一人一人の僧侶は、皆、サンガの代表者である。

- 5、仏法僧の三宝、因・果と業力の法則に対して、堅固な信心を持つ。
- 6、内心で、この供養の功德は、未来において、涅槃を証悟する助縁となるようにと、祈願する。

供養する前、供養している最中、供養した後、いつの時も、心の力を強く維持し、また、正念がなければならぬ。妄想をやめ、唯一、この六種類の要素を思惟しながら、供養をする。もし、一項(=一回)の供養において、この六種類の要素が具備されたならば、それは将来において、無量で崇高な果報を齎す。この六種類の要素によって行われた供養の、その功德の巨大さは、形容しがたいほどであり、計算できない、衡量できない、という計量の仕方・・・ちょうど大海の水は、量る事ができないのと同じである。

我々は、”大海の水は桶に何杯、何百杯、何千杯、何十万杯である” とは、言えない。ただ、計量しがたい、無限の量として計算するのみである。同様に、この六種類の要素にもとづいて行われた供養によって生じる功德もまた計量しがたく、その膨大さは、計算しがたい、無限の量である、として形容するしかないものである。托鉢する清浄なる出家者は、ちょうど ”動く福田” のようである。智慧ある人々は、福田を耕す機会を掌握する事に敏で、この機会を借りて福德を積む。

明(=智慧)と行(=実践)の種と菩提道(=悟り)の糧、すなわち、己自身の遠い未来における、幸福と楽しさの因を蒔いた事になる。また同時に、サンガに供養した功德は、すでに亡くなった親族や無量無辺の衆生に回向する事もできる。

## 付録2 サンガ護持編

---

”世尊の弟子サンガは善行道者であり、世尊の弟子サンガは正直行道者であり、世尊の弟子サンガは如理行道者であり、世尊の弟子サンガは正当道行者である・・・すなわち、四双八輩であり、この世尊の弟子サンガは、供養を受けるべきのものであり、供奉を受けるべきのものであり、布施を受けるべきのものであり、合掌されるべきのものであり、それは、世間における無上の福田である。”

この世間において、明眼となり、暗黒の中の松明となり、迷いの中（+にある人々）の道しるべとなり、耕耘する者の福田となり、真理を尋ねる者の行先、病む人の保護者となり、輪廻の旅人の帰依処として一一清浄であり、和楽であるサンガが世間にある事は、特別に貴い。

仏教の三宝の一つであるサンガは、非常に神奇な伝統で、仏陀入滅後の2000年来、どれほど多くの凄惨な風と苦い雨の侵襲を受けたり、またサンガの構成員の変動と、その素質の良し悪しはあっても、仏陀の制定した伝統は、依然として今日にまで傳承される事になった——ちょうど長江のように——綿々と絶えることなく。

ただ真心より真理を尋ねる者がおり、己の生命を献じて、その伝統の構成員になりたいと望む人がいて、この伝統に依って（+法を）忠実に実践する人がいる限り、この古老の伝統は、あとの半分の道標に向かって、歩き続けることができる。

サンガに供養する事は、個人に供養するよりも、更に殊勝であるということは、サンガを護持するという事が結局、法脈が引き続き繼承される所の伝統を、護持していることになるからである。正法の世に住むことは、持戒が清浄なるサンガを必要としており、清浄に行道するサンガは、四双八輩を育成する大きな揺りかごであり、清浄で、操を守る大環境の下で、サンガ構成員の素質を自然に高め、素質のよいサンガ構成員は、また、在家信徒衆に対して、正しい仏教の教育を与えることができる。

サンガと信徒は相互に向上し、仏教社会全体を向上させることができる。仏教社会全体の法における利益が、己自身の心内から湧き出る時、自然に、周囲の衆生に、法の呼びかける力を感応せしめて、（+衆生は）陸続と生命を昇華させ、それによって心内の修行と、外部への弘法の効果と利益を得ることができる。

この古老の伝統は、いまだ今日まで傳承し続けることができるのは、仏陀の法と律が、大きな二つの梁である事以外に、在家信徒衆もまた、大きな役割を果たしている。持戒が清浄なサンガは、広大な信徒衆の護持から離れる事はできない。お互いに唇齒相依であり、

それは将に仏陀が《小部・如是語第 107 経》において、以下のように述べている：  
”比丘たちよ。諸々の婆羅門、居士があなた方に対して、多くの援助をしています。彼らは、あなた方に衣服、飲食、住まい、病人の必要とする医薬品などを供養しています。あなた方は、諸々の婆羅門、居士に対しても、多くの援助をしています。というのも、あなた方は彼らに対して、初めも善く、中も善く、後ろも善い、有意義な、言葉の整った正法を述べて、完全な円満な、遍浄なる梵行を顕示しました。

比丘たちよ。このように、お互いの相互の助け合いを通して初めて、諸々の流れを超越する方向への導き、苦辺を尽きる為の梵行は、ここにおいて、住し立する事ができるのです。”



### 一般家庭におけるサンガ施

南伝の出家者は、早朝、衣を着用して、人々のいる場所に行って托鉢する以外、その日の朝、未だ誰かの要請を受けていないならば、出家者は、施主の要請を受けて、その人の家に行って、供養を受ける事ができる。これは、現代では<一般家庭での供養 (house dāna)>と言う。これもまた、仏陀の時代に、信徒たちが仏陀とその弟子たちを供養した方法でもある。出家者に要請して、己の家に来て供養を受けてもらうのは、非常に簡単で、実際の一般家庭においてサンガ (+or 僧侶方) の供養をしたいと思う施主は、以下に書く事を参考にされたい。

南伝の出家者は、俗人の家に処する時、行く時、留まる時、座る時、食事する時、説法する時等々、非常に多くの行動規範があつて、決められた威儀を守れなければならぬ。故に、以下の事に関して、施主は注意を払う必要がある。すなわち：

1、施主は、己自身の願望と能力に従って、一人のまたは大勢の出家者を、自分の家に招いて供養することができる。通常、施者は、少なくとも4人の僧侶方を招いて、サンガ施 (saṅghika dāna) をする事が多い。というのも、四人以上の比丘がいて、初め



でサンガと呼べる、という理由がある為に。しかしながら、ただお一人、またはお二人、または三人を招いたとしても、問題はない。施者が供養する時に、心の中で：“尊者（方）は、サンガが派遣した代表である” と思うか、または、供養する時に、サンガの要素と美德を思惟すれば、サンガ施は成立する。

2、まず施主は、出家者に能動的に、招待の件を申し出なければならない。要請する時、留意しなければならないのは、出家者に以下の事を言うてはならない、という事である。

”私の家に来て、食事して下さい、麵を召し上がって下さい、または pizza などの名称・・・”

相談して、適当な日時と時間を決めたならば、当日、迎えに行かねばならない。

南伝の出家者は、戒律によって、女性と同行する約束をする事ができないので、男性に対して約束し、男性に同行してもらう必要がある。また、男性の運転する車で送迎する。もし、女性の運転する車で送迎するのであるならば、男性が一人、同行しなければならない。出家者は単独で女性と車内にいる事は許されない。たとえ出家者が車の後部座席に座っても、戒律違反である。

3、出家者が今だ到着する前、尊敬を表す為に、施主は、家を綺麗に掃き清め、出家者が清潔な場所で食事ができるようにする。施主は先に、出家者の座る場所を用意しておく必要があるが、（+出家者は）椅子に座ってもよいし、床に座って、胡坐をかいてもよい。しかし、伝統的に、または個人の修行の内容によって、ある種の出家者は、通常、高い足を持つ椅子に座らない。ある種の出家者は、手で食事し、または”一座食”を実践する。

”一座食”とは、食事をする時、一度座ったならば、食事が終わるまでそこを動かない事を意味する。故に、出家者の座席の横には、手を洗う為の綺麗な水、ハンドソープ、石鹸、お盆、ナプキンやゴミ箱などを用意して、出家者に使って頂くのがよい。

4、病気でない出家者は、履物を履いて俗世間に出かける事が出来ない所以、家の前には、足を洗う水と足を拭く雑巾を用意して、裸足で歩いてきた出家者が、家に入る前に足を洗えるようにする。

5、出家者が施主の家に到着したならば、施主は自ら出家者の為に足を洗い、拭いて差し上げるのがよい。この行為は、己自身にとって、非常に殊勝な善業を積むことができる。出家者が家に入ったならば、尊敬を表す為に、施主は、出家者に座る事を勧めるべきである。

6、出家者が厠に行く必要がある時、施主は以下のように言う：

”尊者／Bhante（方）、我が家にいる間、家の中のすべてのものは、随意に使用して下さい。厠でも、飲料水でも、どうぞご遠慮なく！”

出家者は、寺院または林野以外の場所で、右肩を露出する事が出来ないので、より配慮する施主は、更に出家者に以下のように言う：

”尊者／Bhante（方）、この期間、私は、この家を尊者／Bhante（方）に臨時の寺院として提供します。”

または、以下のように言う：

”尊者／Bhante（方）、あなた（方）は、私の家を、休憩所としてお使い下さい。”

施主が要請した後、もし、出家者が居士の家で暫く休憩したいと思った時、彼は（+施主の懇願により）、披覆（full robe）を外し、右肩を露出することができる。こうすれば、厠に行くのも、食事をするのも、休憩するのも、行動しやすくなる。

7、出家者が在家の家にいる間、施主は、出家者への尊敬を表す為に、TVをつけて番組を見たり、音楽を放送したりしてはならない。

8、施主の供養が、施主にとって、大きな利益と果報が齎されるように、もし、時間の余裕があれば、たとえば、出家者が、食事をする為の時間が十分に余裕がある時、伝統によれば、出家者は供養をされる前に、施主に三帰依五戒か、または八戒を授け、施主が清浄で瑕疵のない五戒または八戒の戒体の下で、布施ができるようにする。

9、南伝仏教の比丘の戒律によると、歯ブラシと水（注1）以外の、すべての、口に入るものは、必ず授与される必要がある。食事の準備が終わった後、施主は、施主自ら、すべての食べ物を、出家者に授与しなければならない。授与とは、出家者が手を伸ばせば届く距離の範囲内に施主がいて、施主が出家者の横に膝まづくか、立ったりし、身体、例えば手などで、身体と物、例えば皿、盤、スプーンなどと接触する事を通して、または三種類の方式の内の一つで以て与え、出家者は身体によってか、または身体に接触する形で、物を受け取る事を言う。

タイの伝統では、出家者は、ハンカチか小さな布きれでもって、それを身体との連結物とする事がある。この場合、施主は、食べ物を布の上に置けばよい。例えば、出家者が椅子に座って食事をするとして、そして、テーブルの上の食べ物が多く、また重い時、施主は一皿また一皿と、食事を授与して供養する；

もし、テーブルが小さく、食べ物も重くない時、一人か、または二人、または多人数で、小さなテーブル全体を持ち上げて、出家者に授与することもできる。条件としては、テーブルと、その上の食べ物の総重量が、一人の、標準的な男子が持ち上げられる

程の重量である事と、食べ物を授与する時、すべての授与者、一人であろうと、大勢であろうとが、出家者が手を伸ばせば届く場所にいななければならない。そうでなければ、如法ではなくなる。

(注1) 古代の印度では、水は無料であったため、仏陀は、井戸水、庭先に置かれた水、道路わきに置かれた甕の中の水など、他人の所有する水であっても、比丘は断りなく飲んでもよいと決めていた。しかし、現代では、水は水道水であって、施主にとっては有料の物であるため、出家者は慎重を期して、水も授与されてから飲むようになった。

10、出家者に果物、トマト、キュウリなどの生野菜を供養する時、その野菜・果物の種がいまだ成長する可能性のある場合、施主は出家者に<作浄(浄を為す)>のやり方を学ばねばならない。その方法は、野菜・果物がいまだ施主の手にある内に、または出家者がそれらを施主に渡した後、出家者が施主に言う：

” Kappiyamkarohi (あなたは作浄しなさい) 。”

この時、施主は、ナイフまたはフォークで、それを切るか(つつくか)、またはそれに傷をつけるか、またはライターで焼くか、ライターでこするかして、答える

” kappiyam Bhante (尊者、作浄は終わりました) ”。

もし、果物が多い時、例えば葡萄などの時は、一粒一粒作浄するのではなくて、葡萄の粒が全部相互にくっついているのを確認した後、(+一粒に)作浄すればよい。スリランカとタイの伝統では、出家者は三度作浄する事を要求する事がある。作浄した後、施主は、野菜・果物を手でもって、出家者に授与する。もし、可能ならば、供養する前に、果物の中の種を取り除いておけば、直前の作浄を省略することができる。

11、食べ物の供養が終了すると、出家者は施主のために、祝福文、護衛経、随喜と回向の功德を念誦する。この時、経験豊かな施主なら、清らかな水を満たした銀の水差し(=急須)を右手に持って、出家者が念誦する回向功德文に合わせて、己も念誦しながら、その水を、碗から水があふれて、盤(=受け皿)の上にこぼれ落ちるまで、銀の碗に水を灌ぐ。これは施水の儀式である。

施水の儀式は、伝統的には、正式の布施の儀式と見做され、上座部仏教の国家では、普通に見られる。時には、施水の儀式は(+供養の後)暫く経ってから後に、行われる事があるが、いつ行うかは、儀式を先導する出家者によって決められる。

12、施主は、出家者に先に食事を始めてもらおう。施主は、出家者と同じテーブルについてはいけなく、出家者が食事をしている最中に、説法を要求してもならない。静粛を保ち、出家者に安心して食事して頂く事。

13、出家者が、余っている食べ物を、在家に対して、食用してもよいと言うまで、施主は出家者の前に並んだ食べ物に手を触れてはならない。というのも、在家が一たび、これを持ち去りたいという思いで食べ物に触るならば、出家者はこの食べ物を食する事ができなくなるからである（再度手で授与すれば、食べられる）。ただし、なにがなんでも持ち去ろうという気持ちではなくて、ただ奉仕の気持ちで、出家者にご飯を足したり、おかずを足したりしたいだけであったならば、それは可能である。ある種の伝統では、上記の場合、慎重を期して、食べ物をもう一度、手でもって授与するようにする事がある。

”一鉢食”を受持している出家者は、すべての食べ物を一つの鉢の中に入れてしまい、己自身は、鉢の中の食べ物しか食わず、鉢の外の食べ物は、施主の処理に任せる事がある。出家者に供養した後、施主も食事を始めてもよい。

しかし、緬甸（ミャンマー）には一種の伝統があつて、彼らは出家者が食事を済ませ後に初めて、自分の食事をするのを好む。というのも、彼らは出家者が食事をして、この機会を利用して、奉仕の行動を通して、功德を積む事ができる（+と考える）からである。

彼らは、出家者の為に食べ物を運び、手を洗う水を用意し、ナプキンを渡し、必要があれば、彼らは出家者の為に団扇を扇いで、涼風を送る。このような良き伝統は、己自身が更に多くの善業を積みたいと思う者にとっては、見倣つてもよいものである。

14、出家者が食事を済ますと、通常は、出家者は歯を磨いたりするので、施主は、お手洗いを優先的に出家者に使ってもらい、また、進んで、出家者の鉢や食器を洗うのがよい。もし、その日は天気良ければ、鉢を洗って拭いた後、太陽の光の下で二、三分乾かすとよい。もし曇天であれば、外において風に触れさせ、雨の日ならば、鉢を布巾で拭くだけでよい。

食事が済むと、施主は、出家者の為に座席を設け、施主の為に、施主が日頃疑問に思っている事柄を説明してもらったり、経を誦して祝福してもらったり、随喜して功德を回向したりする。食後のどの時間帯においても、施主は出家者に非時果汁、七日薬、終生薬、袈裟または如法の必需品などなどを、布施することができる。

15、南伝の出家戒の衆学法（*Sekhiyā Dhammā*）によると、身体が低い位置にいる者は、身体が高い位置にいる人または病気でない人に、説法をしてはならない。故に、法を聞く時、または出家者に仏法を開示してもらつた時、施主は、床に座るか、出家者より低い場所に座り、法に対して尊敬を表す。

家庭におけるサンガ施は、仏陀が讃嘆した供養の方式である。福德・善業を積みたいと思う智慧ある施主、または（+家庭に）慶事のあった場合、皆、僧侶方を家に呼んで、このような供養をする。この種の供養の全体の過程において、施主の一家の人々は、大人も子供も自分の出来る事をして、お金のある者はお金を提供し、力のある者は力を提供する。如法に布施の物品を用意し、色々構想を巡らせ、美味な食事を提供する事を通して、僧侶方に対して、敬虔、敬い、親善、尊敬など等を表現する事は、己自身と家人にとって、無数の善業を累積している事になるのである。というのも、家庭におけるサンガ施は、殊勝なる

- ” 自ら布施する”
- ” 細心の布施”
- ” 智相応の布施”
- ” 付属品も同時に布施する布施”
- ” 善士の布施”

など等が、容易に具足する事が出来るが故に。

アビダンマを研究した事のある人、または観智を有する禅の修行者は皆、心内において、（+施主が）出家者を招待して、供養をしようという考えが浮かんだ時から始まって、その後、色々と行動し、計画し、招待し、買い物し、煮炊きし、送迎し、三宝に礼拝し、三宝に帰依し、受戒し、サンガに供養し、奉仕し、法を聞き、皆で喜びを分け合い、功德を回向するまでの過程全体の中に、量る事のできない多くの善業の心の流れが、その痕跡を残すことを知っている。

後々、心が、一たび、己がかつてこのような殊勝な善業をなして、歓びにあふれた時の事を思い出すと、それによって、歓びの心で再び、無数の善業を為すのであるが、それはまるで雪だるまが転がるかのようであって、その歓びの効力は、どんどん大きくなるのである。

そして、これらの善業の中の大部分の善業は、無尽業といい、生死輪廻から解脱していないならば、その間ずっとこれらの業は、永久に有効なのである！

そしてそれらは、因と縁が具足した時、果報を齎す事になる。家庭におけるサンガ施は同時に、親兄弟、親戚や友人、左右の隣人に、善知識に親しみ、仏法を理解し、無上の福田に福を蒔く機会を作る。もし、有縁の者が、仏法に対して信心を生じて、三宝に帰依するならば、この功德は無量であり、この事は、出家者に物質的援助をするだけより、更に更に、貴いのである。

仏陀は、在家信徒衆に、己自身が布施をしなければならない事を教えた他に、他人と一緒に布施をするように、とも教えた。このようにすれば、福報が良いだけでなく、人の縁も佳くなり、付き従う人も多くなるからである。施主はまた、この種の家庭サンガ施の功德を、すでに亡くなった親族、祖先神明、天神、家内の守護神、及び一切の衆生に、回向する事ができる。

よく功德を行い、功德を諸々の天陣、龍天護法、大小の守護神、鬼道とすべての衆生に分け与える事のできる善人は、人間ではない所の生き物もまた彼を好んで、守護し、敬愛し、憐愛するようになる。天神がたびたび訪ねて来る家は、光明と吉兆が充満しており、このような家に住む善人は、よく吉祥なる出来事を見る事ができる。

”一人の智慧ある人は、己自身の住む場所において、自制力があり、徳行のある梵行者を供養し、そして、その供養・奉仕を、そこにいる神明に回向（＝転じて献じる）しなければならない。神明は敬愛を受ければ、彼を敬愛し、かつ彼を憐愛する。それはまるで母親が、我が子に向ける愛情のようであり、神明に愛された人は、よく吉祥の事柄に出会う。”《長部・第16大般涅槃經》

家庭サンガ施は、サンガと信徒の和合を繋ぐ事に関して、深遠な影響を及ぼす。家庭サンガ施を通して、出家者と在家は、更に親密な交流と助け合いを行い、僧侶方はその事によって、施主の状況を更に深く理解する事ができ、その事を通して、適切な指導と癒しを与える事ができる。施主は、僧侶方の行いや職責を理解して、お互いの隔たりや誤解を、解消する事ができる。家庭サンガ施は、サンガと信徒を繋ぐ橋梁のようなもので、施主方の、福と慧の増長する源泉でもある。



## 南伝出家者護持指南

---

### Mendaka Kappati :

” 比丘たちよ。もし人々に信心があり、浄信があるならば、彼らは、金銭を浄人の手の中に置くであろう：『これによって尊師が許可する[品物]をお渡し下さい。』と。

比丘たちよ。私はあなた方が、このようにして[得る事を]許された[品物]を受け取ることを許可する。しかしながら、比丘たちよ。私は[あなた方が]どのような方法でもってしても、金銭を受け取り、探し求める事は許可しない。” 《律蔵・小品・薬篇》

仏陀の時代、護法の居士は僧侶方に対して浄信があり、常にサンガの必要に応じて、サンガを護持した。しかし、居士たちは生活が忙しく、毎日毎時間、僧侶方の必要に合わせて、彼らの世話する事ができなかつた為、仏陀に（+申し出て）、浄人が彼らに代って、出家者に必需品の供養する事を、許可してもらった。このような因縁から、” Mendaka Kappati” が生まれた。護法の居士は、先に金銭を浄人に渡しておき、その後、浄人に対して、彼らに代って、僧侶方の生活の必要に合わせて、お世話するように頼んだのである：” 世尊の許す品物を、尊者方に供養して下さい。” と言って。

出家者が、ある種の必需品が必要になった時、彼らは浄人に対して（+品物を）求め、浄人は、護法の居士が供養した金銭でもって、如法の必需品を（+買って）準備し、出家者に供養したのである。

出家者が適切な時期に、適切な必需品を手に入れた時、護法の居士もまた非常に殊勝な ” 応時施” を成就する事ができる。応時施は、布施する者に、適切な時期に適切な事柄にであう機会と、適切な果報を齎し、その為、生命（+現象として）も、またよく貴人に出会って、助けてもらえるようになる。以下は、” 応時施” の功徳を累積したい護法の居士と、浄人の参考になるように書いた。浄人は、サンガの護持方面において、出家者が清浄な戒を守るのを支援する事ができるよう、いくつかの詳細な事柄について、留意しなければならない。

戒清浄の基礎の上に立てば、出家者の道業は、更に容易に成就する事ができ、広大な信徒衆と布施者たちに、更に良好な功徳を齎す。いわんや浄人は、この方面における功がないはずがなく、浄人の奉仕という役割を担う事によって累積した功徳は、浄人自身の菩提道業を、大いに高めるものである。

上座部南伝仏教の伝統の、法と律の下で出家した修行者は、如法に供養された必需品しか受け取ることができない。どのような形式であっても、金銭、例えば、現金、小

切手、クレジット・カード、キャッシュ・カード、金銀宝石などを受け取り、所持する事は、できない。南伝の比丘戒、沙弥戒を受けた者と十戒尼・・・上座部を傳承するすべての出家者は、金銭を受け取り、金銭を使用し、金銭を管理し、金銭を支配するか、または交易売買する場合は、すべて戒律違反である。

＜金銀不所持学処＞の下で、親族・眷属、施主、個人または団体、寺院または道場が、定期的に発給する所のお金を、日常の生活費とするならば、または衆生と接触して弘法する所の、事業の経費とするならば、南伝の出家者は一律、それを受け入れてはならない（戒律違反である）。

もし、一人の施主が、いくらかの資金でもって、一人の南伝の戒を受ける出家者に ” 四種類の資具として ” 供養をしたいと思った時、またはその他の如法な必需品と同価値なものを供養したと思った時、出家者が戒を犯すのを防ぐ為に、最もよい方法は、施主が当該の出家者の浄人（注1）が誰であるかを、知っている事である。

その時、施主は、その資金を、責任を負える所の浄人に直接渡し、その後に、施主自身か、または浄人によって、当該の出家者に妥当で如法な招請・招待をする。もし、施主が浄人が誰であるかを知らない時、施主は、誰か浄人になってくれそうな人に話しておき、出家者に対して、施主は、以下のように述べればよい。

- ” 尊者／Bhante、あなたの為に奉仕する浄人は、誰ですか？ ”
- ” 尊者／Bhante、私はあなたに如法の必需品を供養したい。あなたの浄人は誰ですか？ ”
- ” 尊者／Bhante、事を執する人はいますか？ ”
- ” 尊者／Bhante、施主があなたに如法の必需品、価値が XX 円を供養したいと思っています。あなたの浄人は誰ですか？ ”

出家者の為に如法に必需品を処理できる浄人の存在を確実に確かめた後、施主は、当該の資金を浄人に渡すか、または浄人から出家者に供養・要請・招待の内容を伝えて貰う。注意しなければならないのは、要請する人は、最低でも、一人は必要である事。そうでなければ、施主自ら要請するにしても、浄人から出家者に対して要請するにしても、出家者は必需品の供養を要求する事ができない。施主または浄人の要請は、口頭でもよく、書面でもよく、要請カードでもよく、供養カードを使ってもよい。

■ 出家者は必需品の価値がどれくらいであるかを知っていなければならない。このようであれば、出家者は必需品を要求する時、施主の供養した数量（+金額）より多く要求する事がない。



■施主は、一人の出家者に対して、終生供養の招待をする事ができるが、しかし、それ以降に、因・縁の変化によって、出家者が、施主は、すでに経済的問題に陥っているとか、または信心が動揺していると知った時、たとえ施主が、出家者にそのような説明をしなくても、この供養・招待は、自動的に解消される。

もし、（+困難な状況の中においても）施主に、出家者に対して、いまだ十分な信心がある時、最も理想的なのは、彼は期間を決めて出家者に供養・招待・要請を提案し、出家者に己の信心が、いまだ存在する事を知らせる事である。（後略）

（注1）浄人。kappiyakāraka 略称して kappiya。比丘が（+供養の物品を）受け取れるようにしたり、使える様にしたりする。すなわち、比丘が清浄戒を受持できるように、比丘に奉仕する人。ある種の誤解により、浄人は、比丘の代わりにお金を受け取る人であると思われているが、実際は、浄人は、ただ、比丘が必要な時に、如法の物品を受け取れるように、施主に代って、お金を保管しているだけである。

出家者は、必需品を手にするのであって、金銭を手にする事は決してないことに注意する。

